

生活世界の社会学

矢谷 慈 國

Sociology of Life World

Yoshikuni YATANI

要 約

この論文においては、まず「自然的態度の構成現象学」という立場から独自の生活世界の社会学を展開した、A. シュッツの生活世界論の大要を提示する。生きられた時間空間の構造の分析から出発して、生活世界の社会的構造と常識的知識の特性、多元的リアリティ論の創発的意味とその問題点についてまとめている。

次に、シュッツの死によって充分展開されないままに止まった多元的リアリティ論をより経験社会的な今後の研究にとって「使い物」になるように試みた、筆者独自の、「弁証法的な身体の現象学の立場」からの展開を提示する。

それは、(1) ながら行為の理論、(2) 多元的リアリティの社会的次元、(3) リアリティの深さの次元、(4) 日常と多元的リアリティの媒介メカニズムとしてのながら行為(身体)と日常言語、(5) 時間の中のスケジュール化、(6) 貨幣の媒介メカニズム、(Ⅲ) 多元的リアリティの分化と統合についての諸考察である。

キーワード：生活世界、多元的リアリティ、ながら行為、近代社会における多元的リアリティのルーティン化

I. シュッツの生活世界論と多元的リアリティ論

「生活世界」という考え方は、現象学的哲学の創始者フッサールが最晩年（1935年）に書いた『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』¹⁾の中で、科学との対比において「科学以前のあるいは科学以外の生活世界」という形で最初に提示された。しかしフッサールは「生活世界という問題」を提起し、それについての基礎的方法論的考察を行ったものの、その具体的内容を充分展開しないうちに世を去ってしまった。そしてこの「生活世界の構造」の分析を「自然的態度の構成現象学」というより経験的具体的な形で行ったのはシュッツだ²⁾った。

(1) 生きられた時間・空間

私にとって「生活世界」とはまず第一に、私のここ、今を中心にして、時間・空間的に広がっている世界である。この場合の時間・空間は科学で取り扱われる客観的なそれではなく、私と私をとりまく人々の生活の中で生きられ、経験されている時間・空間である。

科学的な時間・空間は等質で、無限に延長と分割が可能で、すべての現象を外から観察し計測する尺度として科学的に設定されるものである。ところが生活世界的な時間・空間は、ここ今に生きている私という主体を中心として、私の生活的な注意や関心にもとづいて生きられている時間・空間である。それは不均質で、伸びたり縮んだり、時にはゆがんだりする質的に多様性と多元性をもった時間・空間である。その中で私がどんな経験をしているかによって、それぞれの生きられた時間・空間は全くその意味や質が異なるのである。

例えば、たいくつな授業を受けていて、早く終らないかとイライラしながら坐っている一時間は重苦しく長く感じられる。逆に音楽や演劇やスポーツなどの好きなことに我を忘れて熱中している一時間はあっという間に過ぎ去ってしまう。また初めて歩く道は通い慣れた同じ距離の道とは異なった長い距離として感じられる。それらは自然科学的には同じ時間の長さ、空間の距離であっても、生きられた体験的意味においては質的に異なるのである。

(2) 生きられた時間の構造

シュッツは生きられた時間に関して、一人一人の主観によって生きられている主観的時間の構造を、反省以前の端的に生きられている時間としての内的持続 (duree)、現在の印象 (impression)、過去把持 (retention)、未来予持 (protention) というベルグソンやフッサールのことば³⁾を使って分析した。

生きられた時間における「現在」とは時計で計りうる直前と直後の間にはさまれた一瞬の空虚な点のようなものではない。それは例えば一つの歌を歌ったり聞いたりしている場合によくわかる。歌ったり聞いたりしているその歌経験の現在は、その始まりからその時に至るまでの一歩一

歩展開してきたプロセスを過去把持として含んでいる。と共に、次の歌詞やメロディーを次々と経て終りに至るプロセスとしての未来予持を展望しながら進行していく。それは生成しつつあるダイナミックな現在である。

またより時間的に離れた過去の記憶や未来への期待が、現在の私の生きられた時間に決定的な意味や色づけを与えることもしばしばある。

シュッツはこのような生きられた主観的時間の構造をふまえて、次のような「主観的に思われた意味」とそれにもとづいてなされる「行為」の定義を行っている。「経験の意味とは、自我が自らの経験を把握したり自らの経験に対して態度をとったりする特別のし方のことである。それは思考（反省的注意の働き）と生活（内的持続）の間の緊張を前提としている。反省的注意を自らの過去の経験（あるいは未来完了形であらかじめ自覚的に思い描かれた未来の経験）に向ける時にのみ、それらの経験は私にとって現象的で述語的で意味的な経験となる。」「行為（action）とは、行為者によってあらかじめ思われた企画（project）にもとづいて進行する行動（conduct）のことである。行為結果（act）とはこの行為の進行するプロセスの結果即ち、完遂された行為⁴⁾のことを指す」。

この定義によれば、すべての経験や行動が意味をもつのではない。経験や行為の意味とは主体によって反省以前の生きられている切れ目のない持続の流れの中に、自覚的反省的に主体が切れ目を入れることによって、他の経験や行動から区別し取り出して、これこれの経験や行為として意味づけた（言語化された）もののことなのである。

しかし、生活世界の中には私一人だけが生きているのではない。私は自分の誕生以前から存在し私の死後も存続するだろう他者たちと共にある世界、社会的世界に生きている。この社会はそれ独自のカレンダーや行事体系、時刻制度や暦制といった社会的時間を形成している。したがって私は自分の主観的時間と社会的時間、あるいは自然の変化の時間（世界時間）との間に折り合いをつけて生きねばならない。

それら諸時間の間緊張を示す現象が「待ち」の現象であり、「第一のことは第一（first thing first）」の理念化である。

私は主観的に自分の時間の展望と価値づけの中で、これこれのことをしたいと思っても、すぐにそれができるとは限らない。ある場所へ行ってあることをしたいと思っても一息飛びでそこへ至りつけない。例えばそれができるとは試験が終るのを待たねばならないし、発車の時刻まで待たねばならない。「第一のことは第一」の理念化も同様である。自分にとってより価値のあること（例えば外国旅行）も、それを実現するためには、自分にとってより価値が低いがより緊急な必要事（例えば、アルバイトをして費用をかせぐ、パスポートを取得するなど）をまず第一にやらねばならないのである。

また私は自分の誕生と死の間の限られた人生の時間の中で、時間を生活史的に分節している。入学、卒業、就職、結婚、昇進、退職など社会的に設定された人生の画期が生活史的分節の指標

となる。それに従順にしたがうにしろ、それに反抗するにしろ、それらは私の人生設計の折り目として機能する。このように私の生きられた時間の諸相は、科学的客観的時間とは異なり、生活世界的構造をもったものとして生きられているのである。

(3) 生きられた空間の構造

私の生きられた空間を規定する原点は、ここ今に生きている私の身体である。私の身体を中心にして、左右、上下、前後、遠近という質的意味的に価値の異なった空間の分節が起る。そもそも生きた主体がなければそのような区別そのものが成り立たない。また、私の生きられた空間（自我空間）は、私の体験の諸相に応じて広がったり縮んだりする。希望に胸がふくらんで自我が広がったり、人目にさらされて身の縮む思いをしたり、勝手に自分の部屋に他人が入ってくると自我が侵害された思いをもったりする。これらの生きられた空間の諸相は、自我の範囲が決して皮膚でおおられた私の生理学的身体の範囲に限定されないことを示している。

シュッツは日常的な生活世界の空間的配列を、私が身体的に到達可能な段階に応じて次のように区分している。

(a) 私のいま現実的に到達している、あるいは操作できる範囲（いま私のいる部屋）(b) 私が潜在的に到達可能な範囲。(b)はさらに二つに分れる。(b-1) かつてそこにいたことがあり、今後再びそこへ到達できる、回復可能な到達範囲（かつて修学旅行で行った町）、(b-2) 未だ行ったことはないが将来そこへ行けるだろう達成可能な到達範囲（未だ行っていない外国の町）。

このような区分は相対的であり、私がどこにいるかによって変化する。例えば私が今旅に出ているとすると、私の家は回復可能な到達範囲にあることになる。

しかもこのような生きられた空間の到達可能範囲は近代の交通機関や通信機関、インターネットなどの技術的発達によって空間的には大幅に拡大され、時間的には短縮化、同時化されてきている。現在の生活世界の空間的構造は近代以前のそれと比して、あるいはつい二十年前のそれと比しても大きな変動を引き起こしている。今や、交通不便でマスコミが取りあげることもない国内の辺境地域（内陸部や離島）の方が、体験空間としては、ニューヨークやパリよりも遠いとさえ言える状況である。

一方、空間移動の加速化は、その移動を体験する主体の、体験の質の面での貧困化を生み出している。同じ目的地に到達するために、一步一步、長い時間をかけて歩いて到達するのと、高速の乗り物で短時間で到達するのとでは、目的地のもつ体験の意味とそれに至るプロセスの体験の意味が異なる。現代では逆に、飛行機で行けば十数時間で行ける外国に、わざわざ船で何週間もかけて行くような旅の方が、あらゆる意味でデラックスな旅となる。

テレビによる同時実況放送は、遠方で起りつつある出来事をリアルタイムで同時的に見聞することを可能にした。ビデオによる録画と再生によって、過去の出来事を家庭で手軽に再現することが可能になった。またオリンピックやダイアナ妃の葬儀というような世界ネットワークで行わ

れる放送は、世界中の何十億の人々が同時に同じ出来事を見聞するということを実現した。

このような時間・空間を克服する科学技術の成果による媒介物は、我々の生活世界の時間・空間体験の構造やリアリティの感覚を急速に、技術化された擬似体験や代理体験の増大の方向に変えつつある。ここ数年間のコンピュータの普及、インターネットでの世界の各地への発信と受信、マルチメディアによる「バーチャル・リアリティ」の商品化などがそれを示している。このような方向での変化の加速化が進めば進むほど逆に「生身の身体をもって直接体験する自然との関わり、全人格で対面しあう人間関係などの、オリジナルな体験の質と意味の回復」が重要となってくるのである。

特にこのことは、現在あるような技術的媒介物が普及してしまってから後に生れ、それがないという体験を持たないで育った現代の若者や子供たちにとって問題となる。彼らは、それがないという状態からあるのが自明となっている現在への変化のプロセスを体験していない。あるということの意味を本当に理解し、あるということによって疎外されないためには、それがないという状況を何らかの形で体験しておく必要があるのである。

自然の一部であり、生身の体をもって自然や他者と直接関わりつつ生きる人間としてのオリジナルな普遍的構造をもった生活世界的体験の回復ということが、今後ますます新しい世代にとって重要な課題となるものと思われる。

生きられた時間・空間の諸層の多彩なあり方については、⁵⁾ ミンコフスキー『生きられた時間』、ホール『かくれた次元』、ボルノー『人間と空間』、市川浩『精神としての身体』、竹内敏晴『ことばが劈かれるとき』、などがそれぞれの立場から興味深い事例を報告している。「生活世界」という問題の諸相を、具体的に自らの視点として受けとめるためには、上の参考文献は刺激に富んだ事例を提供してくれているので、参照して頂きたい。生きられた時間・空間の質的多様性・多源性の問題は「生活世界」の問題を理解するための最もわかりやすい入口である。

(4) 生活世界の社会的構造と常識

シュッツは自然的態度で日常生活の世界を生きる主体にとっての基本的な自明は、原理的に私と同じような身体と意識をもって共に同一の世界を生きる他者の存在であるとする。「私ではない他者をどんな根拠にもとづいてに私が認識できるのか」という他我認識の可能性の哲学的問題は学問的関心を出発点として、学者によってのみ立てられる問題である。日常生活の世界の中で常識的に生きる主体にとって、(哲学者も学的反省に従事していない時は同様に)「他我の存在」は自明の所与であり、証明の必要なくあたりまえのこととして認めている前提である。シュッツはこの自明の所与から出発する。そして生活世界が私にとっても、共に生きる他者にとっても基本的に同一の世界であることを可能にしている原理を「視界の相互性」の一般命題に見出す。⁶⁾

視界の相互性の一般命題は、(一)立場の相互置換可能性の理念化(私と他者は立場のちがいに

よって相互に異なる視界をもつが、立場を置き換えれば、先程相手が視ていた視界を私をもつことができ、その逆も真なので、最初の視界の差異は克服される)と(二)レリバンス(妥当性・有意性・ふさわしさ)の一致の理念化(私と相手は異なる生活史的背景を持っているゆえに厳密に言えば同一のものに対する異なったレリバンスをもつ。が、私と相手が共に生きているここのプラグマチックな状況への適応の必要性は、レリバンスの一致を両者に課してくる)の二つの理念化を含む。

この二つの理念化によって私は、私という孤立した主観が他者と関わりなく生きているのではなく、私以外の主観と共に生きている、主観と主観の相互^{インター}間に共通の世界が成立している(相互主観性^{インタースブジェクティビティ})ことを経験する。

このような相互主観的な社会的世界は、(A)直接的対面的な我汝関係の世界(Umwelt)と間接的な他者体験の世界に分けられ、後者は現在、過去、未来の時間的枠組に対応して、(B)同時代人の世界(Mitwelt)、(C)先人たちの世界(Vorwelt)、(D)後継者たちの世界(Folgewelt)に区分⁷⁾される。

この区分は我と汝が直接的に生きられた時間と空間を共有する関係の直接性と同時性を基準としている。(B)(C)(D)の三つの間接的な関係の原型となるのは(A)の直接的対面関係である。それは相互に汝志向を向けあい、お互いを刻々に変化する具体性と個性的独自性において把握できる関係であるとされる。ところが同時代人の世界は、時間の同時性はあっても空間的に直接対面しあうという要件を欠いている。それゆえ相手を過去の出会いの経験から作られた何らかの類型に照して把握することになる。間接的社会関係のもつ類型化と匿名化は直接的关系のもつ個別化や個性化と両極をなす概念である。類型にはその匿名化の程度に従って個人的な類型(パーソナルな類型)、機能的行為経過の類型(役割)、社会的集合体の類型(集団や団体)が区別される。

過去に属する先人たちの世界は現在の我々の関心から遺品や遺著や資料を通して一方向的にしか接近できないから、関係の相互性を欠いており、何らかの程度の類型化を必然的にもなっている。未来に属する後継者たちの世界は推定や期待によって思い描かれるあいまいな類型にとどまる。

以上のような社会的関係の中で作り出される類型は個人独自のものもありうるが、大部分は相互主観的な類型として日常言語の体系の中に定着されている。このことは人間についての類型だけに言えるのではない。我々の生活世界の中のすべての物や出来事や対象は社会的な類型として共有されており、言語化されている。このように日常言語に定着されたあらゆる類型が我々の日常的知識(常識)の内容を形造っている。

常識の体系はこのように類型化と匿名化によって特徴づけられるが、それはまたそれらの知識を用いる主体にとってのレリバンス(妥当性・有意性)の体系と関わりながら機能している。シュッツはレリバンスの体系を、(A)主題的レリバンス、(B)動機的レリバンス、(C)解釈的レリバンスに区分⁸⁾した。

日常生活の世界の中で我々が常識的に生き行為する場合、その場の状況の定義にとってレバリントな（ふさわしい、妥当な、有意性をもった）類型的な行為が主題として選ばれ、類型的な動機的レリバンス（理由動機と目的動機）に従って、類型的な行為経過をたどり、類型的な結果に至る。そしてその行為のあと、「なぜその時、その状況の中でそのような行為をしたのか」について、自分自身や他者に説明する必要がある場合には、解釈的レリバンスが考慮され、その行為の主題や動機と合せて説明が行われる。

このように相互主観的で社会的に共有されている類型の体系とレリバンスの体系が我々の常識的知識の中味を構成している。それらによって問題なく日常生活の諸経験が処理される場合は、諸経験は自明化され、ルーティン化された日常的な知識のストックに蓄積される。

既存の知識の在庫で間に合わないような事態が起った時には問題状況が出現する。そして問題解決のための意識的な努力がなされる。それは、既存の知識在庫と新しい事態の翻訳関係をつけることによって解決されるか、又は全く既存の知識在庫では役に立たないような場合には物知りの先輩や専門家の知識を導入することによって解決を計る場合や、本人の創造的努力による解決方法の新しい開発によって問題解決を達成する場合がある。後者の場合には問題解決の後、それに動員された知識はこれまでの在庫になかった新しい類型として知識の在庫に付加されることになる。

以上のようなプロセスをへて自明化され類型化された常識的知識が持つ理念化は「以下同様（and so forth）の理念化とよばれる。そこから直ちに「私はそれをもう一度できる（I can do it again）」という理念化が派生し、ルーティン化され、慣れ親しんだ知識在庫となる。

さらにシュッツはこのような常識的知識の体系が社会的に形成され、伝達されることを取り扱う知識の社会的起源の問題を論じている。また、常識的知識をこえる専門的な知識や技術が専門家によって分業として社会的に分布されていることについての知識自体は大なり小なり常識的知識の構成要素となっている。そこから近代の機能的分業が高度に発達した社会に生きるには、専門家に支配されるのではなく、生活の必要に応じて専門家の知識を主体的に利用することができる啓蒙された開明的市民（Well informed citizen）の理念¹⁰⁾が提示されることになる。近代社会の特色は、専門的知識としての科学的認識の成果とその技術的応用が、通俗化され日常化された形で常識の不可欠の構成要素としてとり込まれていることである。このことは、科学的知識と常識の相異と相互関係の問題としてシュッツの科学論、知識論の重要なテーマとなっている。その問題は自然科学に比して人間科学や社会科学の場合より複雑である。

自然現象の場合は、現象それ自体の中で、自らについての解釈や類型構成は行われていない。落体の法則を物理学者が観察によって確かめようとするとき、落下する石（現象）自体がどんな気持ちで何を考えつつ落下しているかを問うことは馬鹿げている。物理学者は、外から現象を観察し記述し、抽象化や数学化の手續をへて現象の一般法則を導き出す。そのようにして構成された自然科学の理論や法則は、自然現象について科学者が作り出した第一次的構成物であることにな

る。

しかし人間現象や社会現象の場合、事態はより複雑である。人間現象や社会現象は科学者によって外的対象として観察されたり法則を取り出されたりする以前に内的に生きられており、それ自らの中で類型化や解釈が行われており、常識の体系という第一次的構成物を作り出している。そして人間科学や社会科学はそのような第一次的構成を内に含んでいる現象についての科学的構成＝第二次的構成¹¹⁾であることになる。しかも社会学者自身も自らが観察し研究する社会現象の中で生まれ育ち、その社会が第一次的に構成している常識の体系を自明のこととして身につけている社会現象の一部である。この構造に気づかずに単純に外的対象として人間や社会を、自然科学者が自然を対象として研究するのと同じやり方で研究できると思ひ込むことは、認識論的にあまりに素朴すぎる。

現象学的な人間と社会への探究はそれゆえ、まず第一に、自らも含めて科学以前の科学に人々が生き、解釈し、常識の体系という第一次的構成を作りあげている、生活世界的経験の構造をこそ解明しなければならないのである。これまで記してきたシュッツの「生活世界の構造と常識についての研究」はまさにそのことを目的として展開されているのである。

(5) 多元的リアリティ論

シュッツは右のような構造をもった日常生活の世界を、至高の現実、基礎的な現実と位置づけた。しかし彼の生活世界論のハイライトは日常生活の現実の分析に止まらず、人間によって生きられる夢の世界・空想の世界、科学的思考の世界などの多元的現実（限定された意味構造をもつ現実の諸領域）について問題提起をしたことである。

多元的現^{リアリティ}実について、多元的な宇宙論という形で最初に論じたのは、アメリカのプラグマティズムの哲学者、心理学者、ウィリアム・ジェームスであった。彼の理論はあくまで、主観によって生きられ経験されている限りでの現実をめぐる¹²⁾展開されている。

彼は「問題提起」として、「いかなる事情のもとに我々は物事を現実的^{リアル}と考えるか、信ずるか。」を問い、以下のように論じた。

(A) 現実^{リアリティ}は単純に我々の情緒的及び活動的生活への関係のあり方によって決まる。「現実の、主体との関係性」。(B) すべての現実の源泉は主観的であり、我々自身である。「現実経験の主観性」。(C) 相互に無矛盾であり続けるあらゆる対象は、事実上信じられかつ絶対的な現実として措定される。「一つの現実を構成する要素間の無矛盾性、首尾一貫性」。(D) 各々の現実^{リアリティ}は主観がそれに参与している限りは、それ自体の様式に応じて現実的である。「各現実の経験様式の独自性、区別可能性」。(E) 意識的な注意の変容によってのみ現実^{リアリティ}は推移する。「注意の変移による現実間の移行」。

このような多元的現実の規定にもとづいて、ジェームスは、感覚の世界あるいは物的事物の世界を至高の現実とし、科学の世界、理念的な関係の世界、部族の偶像の世界、種々の超自然的な

第一図 多元的リアリティの類型比較（認知的様式の六個の枠組み）Schutzの記述からの要約

	A 日常生活の世界	B 空想の世界	C 夢の世界	D 科学的思考の世界
(一) 意識の緊張の様式	はっきり目覚めていること (wideawakeness) 生活への完全な注意 (full attentiveness)	日常生活の世界における意識の緊張からの撤退、緊張の減少。	意識の緊張が最低度となり、受動的注意 (petit perception) が生かされる。	細心な注意とはっきり目覚めた論理的思考によって特徴づけられるが、注意が向けられるのは、日常生活世界の諸対象ではなく、あくまで科学的思考の対象として選び出された対象である。
(二) 特有のエポケー	外的世界とその中の対象物が現にあるように存在しているということについての疑惑、問い。(逆に言えば、世界の实在性とその秩序が自明とされ、信じられている) 基本的な不安 (死) 希望やおそれをとまらなくなるとして生活が行われる。	外的世界とその中の対象物の存在とその頑固な秩序がエポケーされる。空想世界の秩序は、空想者の自由裁量によって可変的である。	外界とその中の対象物とその秩序はエポケーされるが、夢の世界の秩序は空想世界のそれのように自由に決められない。夢の内容は、自由に決められない。夢の内容は、自由に決められない。夢の内容は、自由に決められない。夢の内容は、自由に決められない。夢の内容は、自由に決められない。	すべての利害関心から自由になった観察者の立場がもつエポケー、(1) 自らの主観的観点がエポケーされ普遍的観点がとられる。(2) 現実的なこの私の身体がエポケーされ、客観的な時間空間の中の科学の対象世界が設定される。(3) 日常生活のもつ基本的不安やプラクティカルなレリバンスの体系がエポケーされ、科学的思考のもつレリバンスの体系とおきかえられる。
(三) 自覚性の特有の様式	外的世界に対して自分の身体活動でもって直接働きかけ、歯車をかませる行為、思われた意味(企図)にしたがってなされる行為。人間は世界の中に (in it) 世界に条件づけられて生きるしかないが、同時に世界に対して (upon it) 働きかけ世界を変化させることかできる。なされた行為は取消不可能な結果を生むから、行為には責任がともなう。	抵抗する頑固な外界に働きかけ、それを実用的に変えたり利用したりするという、プラグマチックな動機から自由になっている。空想が空想にとどまる限り、それを日常生活の現実の中で実現しようとする意志を欠いている。	自覚性は最低度となり、夢の内容は受動的に決まり、夢の中では、夢みる者は夢の経過を自ら決められない。	世界を観察し、説明することを専ら目ざす思考行為であるが、世界に歯車をかませる実践的行為ではない。その結果が取り消しや再構成可能である点で、取り消し不能な結果をとまらなくなるとして日常生活の中での行為と異なる。
(四) 自己経験の特有の様式	On Multiple Reality においては、部分的な一側面の自己 (Me)ではなく、全体的な自己 (Me と I の総合) Strukturen der Lebenswelt では多様な役割の観点から社会的に規定された自己 (個性) (Me) と、自由な行為主体としての自我 (I) の二重性。	自分が空想するどんな役割でも自由に演ずることができる。しかしその役割は、部分的自己 (Me) でしかない。巨人にも小人にもなれるが、それは意識によって住まわれた身体としての、生きた有機体の根源的規定の範囲内においてである。	夢の中の自己経験は、内密な自我の志向性が決定する夢のテーマと内容によって規定され、過去の生かされた経験の蓄積に起源をもつ Me である。	世界を観察し、説明する科学者としての役割をとる限りにおける部分的な自己 (Me)
(五) 社会性の特有の様式	相互伝達と相互行為が行われる相互主観的世界と、自分と基本的に同じような意識をもっている他者との直接、間接の社会関係、face to face の関係があらゆる社会関係の基本となり、相互伝達的前提となる。	空想世界は、孤立した個人においても (白日夢) 共同の空想 (子供のゴッコ遊び、集团的幻想) においても成立する。社会関係そのものが空想の内容となることがある。空想世界で出会う他者は、全体的人格としてではなく、典型化された部分的他者である。	夢の世界は本質的に孤立的であり、夢を他者と分有できない。夢の中で他者は、生き生きとした現在の中でたえず変化する全体的な他者ではなく、典型としての他者ととどまる。	他者の経験も、一定の科学的観点から構成されたモデルとして経験される。社会科学におけるコミュニケーションのパラドクス：自分も社会の一部である社会学者がいかに社会を対象化できるか、対象化した科学的知識をいかに日常生活者に伝達できるかが問題となる。
(六) 時間的視野の特有の様式	内的持続 (Duree) と世界時間との出会いによって成立つ、標準時間。	日常的な標準時間の制約からは、時間体験の本来的な非可逆性をのぞいては自由である。	日常的な標準時間の制約からは自由である。	科学的に設定された客観的物理学的时间。科学的思考自体が展開される独自の時間。(過去の蓄積と未来の開かれた地平と開わりつつ、現在の科学的問題に取り組む) 科学者自身の個別なライフヒストリーの時間。

世界、単なる狂気や愚かさの世界などを下位宇宙の例としてあげた。

シュッツはジェームスの多元的宇宙論を前提にして、「主体によって生きられている経験の様式＝認知的様式」の六個の観点を基準にして、多元的現実を相互に体系的に比較しうる区分を行った。認知的様式 (Cognitive Style) の六個の観点とは、それぞれの現実の特有の、(一)意識の緊張の様式、(二)エポケー (判断中止, カッコ入れ) の様式、(三)自発性の様式、(四)社会性の様式、(五)自己経験の様式、(六)時間的視野の様式である。

このような認知的様式の六個の観点を基準にしてシュッツは、(A)日常生活の世界、(B)空想の世界、(C)夢の世界、(D)科学的思考の世界、を多元的現実の具体例として取りあげ、その体系的な比較記述を行った。¹³⁾

第一図は筆者が彼の記述から表の形でまとめたものである。注意深く、自らの現実経験に照して表の記述を読めば、シュッツの多元的現実の考え方の骨組が理解されることと思う。またこの図を横に拡張して、シュッツが取りあげた四つの現実以外の現実へと考察を拡げていく可能性や、縦に拡張して、認知的様式の六個の観点到、例えば身体や空間構造の次元などを付加して考察を深化させていく可能性も拓かれてくる。

シュッツの多元的現実論がジェームスの理論を発展させたポイントは以下の諸点であった。

- (一) 認知的様式の六個の観点を提出することによって多元的現実を、主体によって生きられた経験の様式に即して体系的に分析し、それぞれの独自性を明らかにしうる道を開いたこと。
- (二) 日常生活の社会的世界と諸現実の関係について、前者を基礎的現実、至高の現実とし、後者を前者からの派生によって形成される現実として規定することによって、多元的現実の社会的な分化と発生について考える手がかりを与えたこと。
- (三) 独自のシンボルとサインの理論を展開しつつ、日常生活の現実で人々がコミュニケーションしあう原理をサイン (日常言語体系) に配当し、シンボルは日常の現実から他の多元的現実への超越を可能にする媒体と規定したこと。
- (四) 一つの現実から別の現実への移行は、時間の経過の中で主体の注意の変容によって、意識のあり方の飛躍とショックをとめないながら行われると規定することによって、現実体験の深さの次元や移行メカニズムの考察への道を開いたこと。¹⁴⁾

II. 多元的リアリティ論の経験社会学的展開

上に述べた諸点はシュッツ自身によって十分に展開されないまま彼の死によって中断された。まことに魅力に富む彼の多元的リアリティ論を単なる静態的な類型学に終らせずに、より具体的経験的な社会学的研究に生かすことができるダイナミックなものに改造することが筆者の課題となった。¹⁵⁾

筆者が考え出した方策は、個人主観の意識レベルで主として問題が取り扱われたシュッツの

理論に対して、以下の諸点を付加することであった。

- (1) 現象学的な身体論を導入すること。複数のリアリティ間の媒介メカニズムを「……しながら(地)……する(図)」という、ながら行為の現象を図地分節の理論と錯図構造の理論に結びつけて解明すること。
- (2) 多元的リアリティの相互主観的社会的次元を解明すること。相互主観的な多元的リアリティの分化と統合のあり方を社会進化の観点と結合して考察すること。
- (3) リアリティ経験の深さの次元を考察すること。他のリアリティから日常生活の現実にもどった時の異化体験をともなう「本来的で深いリアリティの体験」と「異化体験をともなわない表層的ルーティン化的な経験を区別すること。
- (4) 他のリアリティと日常的リアリティの間の媒介、移行メカニズムを、身体レベル(ながら行為)、日常言語レベル、時間のスケジュール的区分の三つの観点から考えた。そしてさらに近代社会の機能的分業の下では、多元的リアリティは、専門家の販売する商品となっており、貨幣によって、それらを自由に買ったり消費したりできるという、貨幣の媒介メカニズムが働いていることを問題としている。

(1) ながら行為の理論¹⁶⁾

ながら行為というのは、「……しながら……する」という我々が日常よくやっている行為である。我々は自転車に乗りながら歌を歌うことができる。この場合、自転車をこいで走るという行為は、シュッツの区分では日常生活の現実に属する行為である(前もって企図された目的に向けて自分の身体でもって外界に歯車をかます行為)。が、歌を歌うという行為は、音楽的世界の現実に属するものである。

自転車をこぐことは「地」として、習慣化し、ルーティン化していて、意識の緊張をあまり必要としないで自動的にできる行為である。そのような「地」となる行為を前提にして、こぎながら歌うという「図」、意識の焦点となる行為が同時に可能となっている。この場合、二つの現実とは、同じウェイトの意識の緊張と集中でなされてはいないし、事実上できない。それは、図と地の分節をともなってなされる二つの現実の統合、あるいは同時遂行であると言える。

このながら行為は近年特に若者の間で顕著になってきている行為様式である。ラジオで音楽を聞きながら受験勉強をするのは普通のことになっている。新しいながら能力とながら感性は、ニューメディアやエレクトロニクスの時代を軽々と生き楽しみうるために不可欠の能力と感性の開発であるのかも知れない。しかしそれは同時に、リアリティ経験の深さの喪失という負を伴う。

(2) 多元的リアリティの社会的次元

第一図によると、(A)日常生活の世界の(→)社会性の特有な様式は、人々の間に相互伝達と相互行為が行われる相互主観的世界、社会的世界のそれである。その中で主体は自分と基本的に同様

な意識と身体¹⁶⁾の構造をもった他者と、直接間接の社会関係を生きている。我と汝の視界の相互性の一般命題によって規定される対面的で直接的な社会関係がその他のあらゆる社会関係の基本となり、相互伝達の前提となる。

さらに、個人と社会の関係は、社会による個人の社会化と、複数の個人によって形成され作り出される社会の制度化の弁証法的関係¹⁷⁾として理解される構造をもっている。

この理論的枠組は同様に各々の多元的リアリティが一つの社会の内部でどのように分化されたり統合されており、それらがどのように制度化されたり、相互主観的に伝達されたり共に経験されたりしているか（社会化）の問題として考察することを可能とする。例えば宗教的リアリティの社会的次元に関して以下のような考察が可能でもあり必要でもある。キリストやブッダといった宗教的カリスマがユダヤ教やヒンズー教といった伝統宗教の中で育ちながら、それらとは異なる新しい啓示や悟りという形の宗教的リアリティを獲得する個人主観内部でのプロセス。その新しい宗教的リアリティが最初の弟子たちに伝えられ信じられ相互主観化されるプロセス（原始教団の形成プロセス）。カリスマの死後教団の組織化や教典や儀礼の整備が行われるプロセス（カリスマのルーティン化のプロセス）。教団の歴史的展開の中で引き起こされる内的展開や外的社会環境への適応による変質のプロセス。教派やセクトの分化プロセス。それらの展開の後で原点のカリスマのリアリティに回帰しようとする宗教改革の動きや新しい教派形成のプロセス。など。

同様の考察は、芸術形式や科学理論など、他の多元的リアリティの社会的次元の考察についても有効である。そのような考察は、従来の宗教社会学、芸術社会学、科学社会学などに、それぞれのリアリティの社会化や制度化やルーティン化（日常生活化）の視点を付加する道を開き、新しい分析視角や方法を提供することになる。

さらに、多元的リアリティの社会的次元を問題にするもう一つのし方は、より巨視的に一つの社会の内部的進化の過程で多元的リアリティがどのように分化され統合されてきたかという問題である。

多元的リアリティの分化と自律化は、それを専門とする専門家によって担われているようになる社会的分業の進化に対応して変化する。したがって、専門的な社会的分業や分化が進んだ社会ほど、より自律化した多くのリアリティを制度的に持つことになる。社会的分業が未分化な原始社会では、経済、政治、神話や宗教、芸術、科学などのそれぞれの世界の自律性が明確ではない。それらは相互に混然と侵透しあって境界がはっきり区別できない。それぞれの世界の専門家も分化していないし、時間・空間的分化も明確でない。したがって、第三図¹⁸⁾のような形で社会的分業や分化の進展と対応させて一つの社会内部でどのように多元的リアリティが分化され統合されているかを考察することは、経験社会学的研究、特に全体社会の変動論にとって新しい分析視角を提供することになる。

(3) リアリティの深さの次元

ある日常的でないリアリティの体験が本来的で人格の全体とその最深部にまで至るものである時、そこから日常生活の現実にもどった場合には、日常世界が以前とは異なった非現実的なものと感じられるという、異化体験、ショック体験が起る。

これは我を忘れて没頭し熱中して音楽を聞いたり演劇を見たあと、劇場を出て、日常的な街の風景にもどった時に感じる異和感が例となる。さらに強烈な場合は、全人格的な宗教的回心や悟りの体験の場合にしばしば記録されていることである。¹⁹⁾

仏教的悟りの深化を非常に興味深く表現した、禅の『十牛図』はその優れた例である。それは第一図尋牛²⁰⁾（見失われた牛＝本来の自己を尋ねて山に入り探求を始める）から出発して、次々に禅的リアリティを深化させてゆき、第十図入塵垂手（手を垂れてちまたにもどる）の段階に至る。そこに至ると、悟りのリアリティを獲得しそれを十分に熟させた禅者は再び町へ、日常生活の現実にもどってくる。しかしそれは、リアリティのアクセントを禅的悟りのリアリティにおいて、日常生活を自在にとらわれることなく生きるあり方においてである。

その逆に、週日は抜け目のないビジネスマンとして日常生活の世俗的利害関係の世界に生きている人が、日曜日の朝に教会の礼拝に出席して信徒として教虔な祈りをささげるような場合もある。彼は教会を一步出ると、神の愛のリアリティとは逆の損得勘定の世界に何の疑問も感じないでもどって行く。これは本来的な深い宗教的リアリティの体験とは言えない。それは日常生活の現実にリアリティのアクセントをおいた、宗教的リアリティのルーティン化的経験と言うべきである。

これらの例において、本来的な深いリアリティの次元を判定する基準は、日常生活世界の異化体験、ショックの体験と、そこから帰結する日常生活の変革の事実である。

この観点から見ると、一見して高度に専門的機能的分業を発達させているように見える近代社会は、本当は多元的リアリティの本来的な自律化と分化の世界ではない。それは、近代的な日常生活世界にリアリティのアクセントをおいた、多元的リアリティのルーティン化の世界として性格づけるのが適切である。そしてこのルーティン化的統合の支配原理をなすものが、分業を経済的に支える近代資本主義の原理と、それを支え発展させる原動力となってきた、技術化された近代科学の原理である。

(4) 多元的リアリティと日常生活の現実との間の媒介メカニズム（身体と言語）

(一) 身体の媒介によって可能となる「ながら行為」は前述のように図と地の分節をともないながらも、日常生活の現実とその他の現実を同時に可能とする原理であった。しかしそれはながら行為において図となる現実のルーティン化、その深さの次元の表層化の原理として機能する。図となる音楽世界の現実に深く没頭してしまうと例えば、「自転車をこぎながら」のながら行為への注意が不十分となって電柱にぶつかってしまう。

しかし一方、希な事例では、世俗的な仕事をしていても(図)その根底にはいつも念仏がある(地)という妙好人²¹⁾とよばれる徹底した念仏信者のあり方や、先述した禅の入塵垂手の事例のような、逆の形のルーティン化の場合もありうる。

(二) 我々は朝目覚めて日常的現実にもどった後、昨夜見た夢の体験(夢の現実)について語ることができる。この場合語られる言葉は、日常的現実²²⁾に属するサイン(シュッツの用語)としての日常言語である。それは体験された夢の現実について語ったり、人に伝達したりすることを可能にする媒介メカニズムとして機能する。しかし語られた夢は生きられた夢そのものの体験とは同一ではない。

同様のことは他の科学的思考の現実や演劇の現実、宗教的体験の現実などについても言える。日常言語は、すべての超越的諸現実での経験について、日常生活世界の中で語ること、説明すること、解釈すること、他者に伝達することを可能とする普遍的な媒介原理である。しかし超越的リアリティのルーティン化的(日常的)レベルを超えた、本来の深さの次元は、それを自ら体験し学習した者同志の間でなければ伝達不可能である。

この消息は、同じように悟りのリアリティを体験した禅者同志の間で交される禅問答によく示されている。それは日常のありふれたことばで語られていても、悟りの体験を持たない日常生活者にはわけがわからない。そこでは日常のことばが日常的現実を超越する禅的悟りの現実体験を示すシンボル(シュッツの用語)として用いられているのである。それは同じ体験を自らの体験として持たない限りは了解不能の謎に止まる。

しかし一方、多元的リアリティの深い次元を自ら体験しないでも、それについて語りうるという日常言語の媒介機能は、そのリアリティの本来の専門家ではない多くの評論家を職業として成り立たせる。彼らの機能は多元的リアリティの本来の体験の次元がもつ、日常的現実の異化機能、革新的あるいは破壊的でもありうる機能を無害化し、日常の現実²³⁾に受け容れやすくするルーティン化機能を果している。

皮肉なことに、近代化の進展によって、多元的リアリティの専門家の分業が進めば進むほど、より細分化された評論家が必要となり、多元的リアリティのルーティン化が進行する。その結果として本来のリアリティの深い次元の体験はますます達成されにくくなり、表層的な評論家と本来の専門家の境界がますます識別しにくくなる傾向が増大する。

(5) 多元的リアリティの時間の中でのスケジュール化²³⁾

近代社会の日常生活の現実²³⁾は、一日の、一週間の、一年間のタイムスケジュールを細分化して設定することによって、多元的リアリティを日常的ルーティンの中に位置づけている。これは具体的には、学校のカリキュラムの時間表や、テレビ・ラジオの番組表、年間の行事スケジュール、個人の生涯の生活史的スケジュールという形で実現されている。

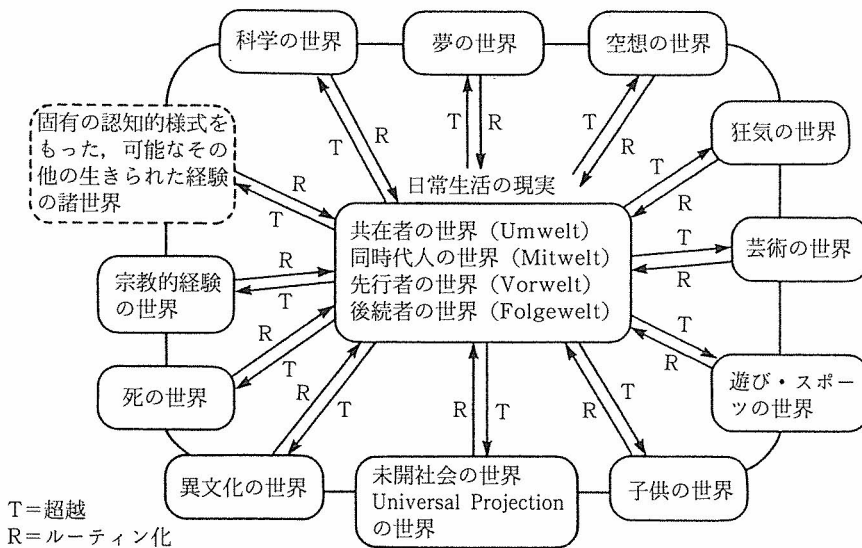
それぞれのスケジュールや時間割は、科学、文学、絵画、音楽、宗教、スポーツ、政治、経済、

法律、外国語、祭りや儀礼といった、本来多元的リアリティとして区分されるべき諸現実を、何の疑問も矛盾もなく（異化体験なしに）、一つの時間表の中に並存させている。そこでは、シュッツの指摘した、多元的リアリティ間の移行の際に起るべき、生きられた体験様式のラジカルな飛躍も、心理的ショックも体験されることはない。そこで起ることは、ますます細分化される表層的な多元的リアリティの日常化、ルーティン化の移行であることになる。

(6) 貨幣による媒介メカニズム

多元的リアリティの機能的分化と専門業化は、資本主義社会においては、そのサービス商品化を意味する。入場料や受講料を払いさえすれば、どんなすぐれた音楽や演劇や絵画でも経験できるし、カルチャーセンターの多彩なコースに入ることもできる。したがって多元的リアリティの商品化は、それを非人格的な貨幣でもって購買し消費する側にとっては、そのリアリティへの深い人格的関与を必要としない、表層的な関わり方を可能とする。

近代社会を特性づけるのは、このような多元的リアリティの増大する専門化、細分化、多様化、商品化と、生きられた体験の深さの次元の喪失であると言える。我々の生きられるリアリティの体験は、まさに軽薄短小の傾向を増大しつつあり、全人格の深奥にまで達する感動や²⁴⁾ショックの体験の貧困化が進行しつつあるのである。以上の論点を図化すると第二図となる。



第二図 日常生活の現実にリアリティのアクセントをおいた多元的リアリティのルーティン化（近代社会）

Ⅲ. 多元的リアリティの分化と統合

以上の考察を社会進化の三つの段階と対応させたものが第三図である。図において社会化のカリキュラムと社会化のメディアとしてあげている問題は、バーガー・ルックマンの言う、社会と個人の弁証法的な関係の構造を理論的な枠組としている。個人の社会化は、彼あるいは彼女が生まれ込んだ社会が、分化し制度化している多元的リアリティの分化と統合の枠組をカリキュラム

第三図 多元的リアリティの分化と統合〔系統発生（進化）と個体発生（社会化）〕

社会的分化(分業)のタイプ (N. Luhmann による)	多元的リアリティの 分化, 制度化と統合の形式	社会化の不在の手	メディア	社会化において課されるもの (カリキュラム)
segment (環節的分化) 未開社会 宗教的, 神話的段階。 性と年齢による自然的分業 パートタイムの分業としての 呪術師・部族の長。 原始的共同体内の分業と共同。 (農業革命)(都市国家革命)	相対的自然的世界観における多元的 リアリティの未分化的神話的統合。 経済, 政治, 宗教, 芸術, 科学, 技 術, 医療, 夢, 空想等の未分化的神 話的統合。(cf. 祭政一致) ユニバーサルプロジェクション (Luckmann)(宇宙と人間の一体化) 個人と社会の未分化: 部族共同体へ の一体化 人間と自然の未分化: トーテミズ ム, アニミズム 精神と身体の未分化: 呪術 聖なるものの日常世界(俗)への浸透 全体的社会現象(M. maus, G. Gurvitch)	家族と部族 両親とすべての大人 子供の遊び仲間 若者組(宿) 娘組(宿) 守護霊の導き	生の形で直接 接する世界, 自然 語りと行為 物の交換 女の交換 ことばの交換	成人の行為と語りの見習い 通過儀礼(男・女別) 身体技法と精神技法の統合 (cf. 狩猟の身体技法と, 呪術的儀 礼手続きの統合) 部族と全メンバーが同じカリキュラ ムを基本的に身につける 男と女のカリキュラムの分化
Schicht (層的分化) 古代中世社会 形而上学的段階 身分カーストにもとづく分 業。 都市と農村の分化。 都 市: 王, 貴族, 僧侶, 市 民(商人, 職人) ギルド共同体。 農 村: 農村共同体。 流動者: 巡礼, 旅芸人, 職人 (産業革命)(科学革命)	神学的形而上学的説明体系にお ける, 多元的リアリティの相対的に層 化された分化と統合。 自律化しようとする政治, 経済, 科 学, 芸術, などの教会神学との妥協 と衝突。(聖と俗の妥協と衝突) (cf. ギルドの守護聖人, 王の教会に よる承認) カリスマのルーティン化 (M. Weber, P. Berger) 都市における職業分化の進展。 農村における分化の未発達 Vorwissenschaftlich (科学以前の)	層に特有の社会化の不在 貴族, 上層市民: 乳母, 家庭教師, 大学教師 中・下層市民: 両親, 親方による 徒弟教育, 僧侶 農民: 両親, 僧侶, 村の 大人	教会, 神社, 市場 祝祭 旅芸人 書物 語り 行為	層に特有のカリキュラム(男・女別) 貴族・上層市民: 古典語, 自由七科とゆるく分化 した専門科目。君子の学, 六芸 中・下層市民: よみ, かき, そろばん, 堅信礼 のカテキズム 職業に特有な徒弟のカリキュラ ム(習うより慣れること。親 方, 兄弟子の仕事を見てそれを 盗むこと)テクネー 農民: 都市より低度のよみ, かき, そ ろばん。農業の実務。 (精神の技法と身体技法の統 合の残存)
Funktion (機能的分化) 近代社会 実証的科学的段階 機能の自立性にもとづく分 業。 理念的にはすべての人間は 一つの専門分業の専門家だ けで, 他の分野については 素人である。	機能的分化にもとづく多元的リア リティの自律化専門化と, 科学的合理的 世界観を基礎としてなされる多元 的リアリティ間のルーティン化の統 合。 ユニバーサルプロジェクションの喪 失。 共同体からの人間の分離。 自然からの人間の分離。 精神と身体分離。 都市と農村, 上層と下層の生活意識 の均質化。 異時代的なものの同時代性。 異文化的なもの同一空間での共存 Mitwissenschaftlich ↓ (科学と共にある) Nachwissenschaftlich (科学以後的)	第一次的社会化 特別に保護されるべき 子供時代という考え方 (P. Ariès, P. Berger) 両親と重要な他者。 教師(すべての科目を 一人で教える) 第二次的社会化 専門化された一つの科 目を教える数多くの教 師。 専門化と素人との間を媒介 する多くの評論家。	行為 語り 教科書 専門書 印刷 ラジオ TV マスメディア 専門機関 コンピュータ	近代化のプロセスで行われた。刑務 所, 学校, 病院, 兵営, 工場での身 体の規律訓練(M. Foucault)(精 神の技法と身体技法の分離) 第一次的社会化 初等中等教育のカリキュラム(多 元的リアリティの均質化と時間割 表による配分)義務教育共通。 合理的科学的な世界観にもとづく, 多元的リアリティのルーティン化 (男女別→男女同等) 第二次的社会化 専門教育によって課される個別的 カリキュラム。 ラジオ, TV, 新聞等のマスメディ アの番組時間表, 紙面割りつけも 多元的リアリティのルーティン化 的統合の機能を持つ。

として課される中で行われるのである。

一方個人は、自分の属する社会が課している社会化のカリキュラムを内在化する中で一人前の社会のメンバーとしての自己形成を行う。と共に、時には既存のリアリティを超える新しいリアリティを形成し発展させることもある。ブッダやキリストが古い宗教観念の中から出発して新しい宗教的リアリティを提示するに至るプロセスや、中世の自然学から近代の自然科学が成立するプロセスや、宗教改革、芸術の諸分野での革新、新しい経済関係の形成やそれを支える社会倫理の形成といった社会変動は、このような個人と社会の弁証法的で相互規定的なダイナミクスから展開してくるのである。

第三図の内容の詳細については拙著『生活世界と多元的リアリティ』²⁵⁾を参照して頂きたい。

この図に書いていないより重要な問題について最後に一言付記しておきたい。それは我々が現在経験している晩期近代社会の経済成長や生活様式の枠組は、二十一世紀の前半に、資源、エネルギー、人口、食糧、地球規模の環境汚染、破漠化、南北両世界の間の生活格差の増大などの限界状況²⁶⁾に達するだろうと予測されていることである。その意味で人類は二十一世紀の前半に、一万年前の農業革命、300年前の産業革命に次ぐ新しい根本的な革命（ソフトエネルギー革命とそれに対応する価値観と生活様式の革命）²⁷⁾を必要としている。宇宙船地球号の住民の「生活世界」の変革の必然性にとってあまり時間的余裕は残されていないのである。

注

- 1) E・フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』木田元訳、中央公論社、1900年
- 2) A. Schutz, "The Structures of the Life World" North western Univ. Press. Evanston, 1973 (以下 S. L. W と略記)
- 3) A. Schutz, Der Sinnhafte Aufbau der Sozialen Welt, Vienna. Spranger, 1932 (以下 S. A. S. W と略記)。矢谷慈國『賢治とエンデ』近代文芸社、1997年、第四章一節「志向性のネットワークとしての時間経験」
- 4) S. A. S. W. p. 94
- 5) ミンコフスキー『生きられた時間』中江育生他訳、みすず書房、1973年
ホール『かくれた次元』みすず書房、1900年
ボルノー『人間と空間』せりか書房、1978年
市川 浩『精神としての身体』勁草書房、1975年
竹内敏晴『ことばが劈かれるとき』ちくま文庫、1988年
- 6) A. Schutz, S. L. W. p. 60. 矢谷慈國『生活世界と多元的リアリティ』関学生協出版、1989、12頁～13頁、25頁注22)
- 7) A. Schutz, S. L. W. pp. 59～92
- 8) A. Schutz, "Reflection on the Problem of Relevance" Yale Univ. Press. 1970, S. L. W. pp. 182～228
- 9) A. Schutz, S. L. W. pp. 324～332.
- 10) A. Schutz, Collected Papers II, The Hague Nijhoff. (以下 C. P. II と略記) pp. 120～134
- 11) Schutz, C. P. I, pp. 3～7. 矢谷『生活世界と多元的リアリティ』1頁～2頁

- 12) W. James "The Principles of Psychology" Henry Holtaco., 1980, Vol. 2, ch. XXI "The Perception of Reality".
- 13) A. Schutz, C. P. I. "On mulptiple Realities" "Symbol, Reality and Society", pp. 207 ~ 259.
- 14) 矢谷『生活世界と多元的リアリティ』39頁～43頁, 102～106頁
- 15) 矢谷『生活世界と多元的リアリティ』はまさにこの課題に筆者なりに取り組んだ成果である。
- 16) 矢谷『生活世界と多元的リアリティ』77～80頁, 181～185頁
- 17) バーガー・ルックマン『日常世界の構成』山口節郎訳, 新曜社, 1977年
- 18) 矢谷『生活世界と多元的リアリティ』114～139頁
- 19) W・ジェイムス『宗教的経験の諸相』教文館, 1900年
- 20) 山田無文『禅の十牛図』禅文化研究所, 1985年, 矢谷『生活世界と多元的リアリティ』110～114頁
- 21) 『柳宗悦妙好人論集』岩波文庫, 1991年
- 22) 矢谷『生活世界と多元的リアリティ』123頁
- 23) 同上, 122～123頁
- 24) 矢谷『賢治とエンデ』近代文芸社, 1997年, 33～37頁
- 25) 矢谷『生活世界と多元的リアリティ』114～139頁。この図の初出は, 図書, 116～117頁である。
- 26) 『ローマクラブ編 人類の危機レポート 成長の限界』ダイヤモンド社, 1972年
- 27) シューマッハー『人間復興の経済』, 佑学社, 1976年
オダム『人間・自然・エネルギー』, 共立出版, 1978年
- 28) 矢谷『賢治とエンデ』の中で提示した, 賢治とエンデの中に見出される「近代批判」「エコロジー的世界観」「ユニバーサル・プロジェクション」「多元的リアリティの統合の理念」「芸術の治癒力という考え方」などが, この方向での筆者の思考を表明している。

1997年10月11日 受理